

いっぽんのキ 第一卷

北村  
想



登場人物

第一話・ひこばえ 1・5

眼鏡の女

伐採の職員

第二話・雨宿り 1・19

山歩きの女1

山歩きの女2

第三話・葬儀のあと 1・35

女1

女2

男1

男2

第四話・タイムカプセル 1・43

男1

男2

男3

女1

女2

女3



第一話・ひこばえ

一本の木がある。

というよりも、幹だけが立っているといったほうが適切だろう。

たぶん、枯れて久しいのだ。

とはいえ、この枯れ木、死木にみえる木のひとところに、新芽が出ているのが分かる。

——「一本の木があつた。

という女性の声。

度の強い眼鏡をかけた女がたぶんセロのケースだろう、それから椅子を重そうに手に持ち、ナップサックを背負つて現れた。木の傍に椅子を置き、セロケースを下ろし、ナップサックからは如雨露と水筒を出して、水筒の水を如雨露に移すと、木のまわりと新芽に水をやった。それから新芽にそつと触れると、ケースからセロを取り出して演奏し始めた。と、男が来る。作業員らしい。鋸を手にはしている。スケールで木を計り、チョークでしるしなど付け始めた。怪訝な女の表情。

女「あの、何してらっしゃるんですか？

男「え？誰？

女「誰って、あなたしかいないじゃありませんか。

男「あ、そうですね。

女「で、何してらっしゃるんですか？

男「記録にとつてるんです。

女「記録？

男「ええ、これこれこういう木でしたという記録です。

女「記録にとってどうするんです？」  
男「いや、一応手順ですからね。」  
女「手順……」  
男「(新芽を見て) ひこばえだな。(女に) ですよね。」  
女「何ですか？」  
男「ひこばえですよ。」  
女「ひこばえ？」  
男「これですよ。」  
女「蠅でもとまってるんですか？」  
男「蠅じゃありませんよ。この新芽。」  
女「それ、ひこばえっていうんですか？」  
男「そう。」  
女「へーえ、ひこばえっていうのか。」  
男「ええ、新芽ですよ。」  
女「ひこばえって面白い名前ですね。」  
男「そうね。」  
女「どんな字を書くんです。」  
男「難しい字ですね。一文字で書くと確か藁(指で書いてみる)こんなだったかな。分かりました？」  
女「いいえ。」  
男「ああ、そうそう、あのね、孫が生まれると書いて孫生(ひこばえ)と読むんですよ。こっちのほうが分かり易いでしょ。」  
女「ひこばえのはえは生えるですか。」  
男「ええ。」

女「それでひこが孫。

男「そうですね。

女「孫が生まれるでひこばえですか。

男「そう。こういう枯れ木にね、突然、新芽がつくんです。

女「最初、無かったでしょ。

男「何が？

女「その新芽。

男「そうですね。なかったですか。

女「なかつたんです。・・・変な木でしょ。

男「そうね、枝もなし、幹だけで生きてきたんだな。

女「この辺でこれしかないんですよね。

男「木ですか？

女「ええ。

男「(辺りを見るが) そうか、ないな。

女「最初、変な木だなあと思つて、見てたんですよね。

男「近所？

女「家？

男「ええ。

女「ええ。あの坂を下りたところ。

男「ああ、新築の住宅がいつぱい建つてるところ？

女「ええ。

男「あの辺、住宅地になつたもんな。

女「最近、引越して来たんです。

男「ああ、そう。いいところに住んでらっしゃいますね。私なんか公園のアパートに家族

四人で住んでるから、羨ましいですね。

女「そうなんですか。」

男「甲斐性なしだね。」

女「私の家だつて、別に私が建てたわけじゃないですから。」

男「あの辺も、雑木林だったんですよ。」

女「あそこ、林だったんですか。」

男「ええ、私たちがそれを伐採して、宅地にしたんです。言ってみましたよ仲間で、ここに建つような家に住んでみたいなつて。」

女「すいません、いいところに住んで。」

男「いや、公団のアパートもなかなか、住めば都です。」

女「あの、話を元にもどしていいですか。」

男「ええ、いいですけど、何の話だったですかね？」

女「ですから、私ね、あつちからこつちへね、それで、ここまで散歩のつもりでのぼつてきて、これ、見つけたんです。」

男「ああ、そう。ここまで。へーえ。」

女「花屋さんがね、」

男「え？」

女「花屋さん。私がいつも行く花屋さんが、ちよつと変わつてるんです。」

男「変わつてるつて？」

女「花に話しかけてね、そうすると、花がね、枯れそうな花が持ち直すんです。」

男「へーえ。」

女「枯れそうな花にね、頑張れ、頑張れつていうと、持ち直すんです。」

男「花屋が、そう言うんですか？」

女「ええ、そこ、花の病院つて言われてるんですよ。」

男「花の病院。」

女「枯れそうな花を持っていくと、ちゃんと元にもどしてくれるんです。サボテンなんかとも毎日、お話してるっていつてました。」

男「そうですか。そりゃあ、珍しい花屋だなあ。何処ですか？

女「三島町の二丁目の交差点あるでしょ。」

男「はいはい。」

女「あの角。花丸。」

男「ああ、そういえば、あつたな。庭の広い、花でアーチが作つてある。」

女「そう、そこ。」

男「あの花屋、そうなのか。」

女「それでね、私もその花屋さんの真似をしてね、この枯れ木の傍でセロを弾くことにしたんです。あのね、音楽なんか聞かせると、いいんですって。」

男「枯れ木に？

女「そう、そうしたら、ほら、これ、出てきたんですよ。」

男「この新芽？

女「ええ、何でしたっけ、ひこ、

男「ひこばえ。」

女「ええ、ひこばえが出てきたんです。」

男「あなた、セロ、お弾きになるんですか。」

女「はい、今年始めたばかりで、まだギクシヤクしてるんですけど、でも、一生懸命つて伝わるんですね。だって、ほら、ひこばえ。」

男「なるほどね。(新芽をじいっと見て)こいつはめずらしいや。」

女「でしょ。」

男「枯れ木に音楽をね。」

女「セロ。」  
男「セロねえ。」  
女「ひこばえ、出ちゃった。」  
男「ふんふん。ほーお。そうなんですか。そいつは惜しいなあ。」  
女「惜しいって？」  
男「いや、伐るのが惜しいなと。」  
女「え？」  
男「伐採するのがもったいないなあって、ちよつと思っただけです。」  
女「伐るんですか？」  
男「ええ。」  
女「この木、伐採しちゃうんですか？」  
男「そうなんですよ。」  
女「どうしてです？」  
男「どうしてって、そりゃあ、あなたは知りませんよ。」  
女「知らないって、何？」  
男「いや、だから、詳しい理由は教えてもらってないってことです。」  
女「理由も分からず、伐るんですか？」  
男「だって、私も仕事ですからね。」  
女「それ、ひどくありません？」  
男「ひどいかどうか、私には分かりませんよ。私はただこれを伐採するように言われただけですから。」  
女「誰に？」  
男「誰にって、そりゃ、上役の偉い人にですよ。」  
女「上役の何て人？」

男「伊原作造っていうんです。うちの課長です。御存知ですか？」

女「伊原作造さん。ふんふん。」

男「お知り合い？」

女「全然。」

男「ま、ともかく、そういうことなんです。」

女「でも、せつかくこれ、ひこばえが出たのに。」

男「ええ、だから、惜しいなと申し上げたんです。」

女「ずいぶんかかったんですよ。この芽が出るまで。」

男「そうですか。」

女「私、毎日ここへ来てセロ弾いたんですよ。」

男「そう。」

女「けっこう重いし、距離あるし、セロだけじゃなくて、椅子も持ってますよ。えっちら

おっちら。

男「まあ、いい運動にはなつたわけですね。」

女「運動だなんて、そんなんじゃないやなくて。」

男「いや、皮肉のつもりでいったんじゃないやありません。」

女「それで、毎日セロ弾いて、それで、ひこばえなんですよ。」

男「そうですよね。．．．まあ、話していても埒があきませんから、伐ります。」

女「待って下さい。」

男「いや、お気持ちは分かりますけど、私もね、

女「仕事だからですか。」

男「ええ、役目なんですよ。」

女「あの、この木、何かまずいんですか？」

男「まずいって？」

女「ですから、この木がここにあるとまづいことがあるんですか？

男「どうでしょうねえ。」

女「全然、大丈夫のような気がするけど。」

男「大丈夫かどうかは、

女「わからないんですね。」

男「ええ。というより、大丈夫だからどうかという問題じゃないですよ。」

女「何が問題なんですか。」

男「いや、私自身について言えば、問題は全くないんです。」

女「でも、伐るんですよね。」

男「ええ、そういう予定になつてますから。」

女「今日だけ待つてもらえませんか？」

男「それは私の決めることじゃないですから。」

女「何か適当に理由をつけて、例えば病気になったとか、鋸を忘れたとか。」

男「それは駄目ですよ。私がこれを伐採せずに帰ったら、別の者が来るだけですよ。」

女「ですから、その方にも今日だけ待つてもらえるように頼んで下さい。」

男「待つてどうするんですか？」

女「あなたの上役の方に相談します。伊原権三さんに。」

男「伊原作造です。」

女「ええ、その方に。」

男「それも駄目ですよ。もう決裁出てますから。ハンコついた後ですから。今日中つてこ  
とになつてんですから。」

女「お願いします。なんとかそこを。」

男「仕方ないですよ。ともかく、私の決めることじゃないんです。すいませんね。」

女「駄目なのか。」

男「でも良かったじゃありませんか。この木も本望ですよ。あなたのお蔭でひこばえ出たんだから。」

女「だから、だからですよ。伐採なんてしなくていいんじゃないかと、私、思うんです。男「ひこばえが出たから伐採しなくていいと、おっしゃるんですね。」

女「そうです。」

男「そういうことで伐採するわけじゃありませんから。」

女「枯れ木だから伐るんじゃないんですか？」

男「そういうことではないみたいです。」

女「じゃあ、どうということなんですか。」

男「ですからただ、この木を伐採するようという指示なんです。」

女「指示どおりに動くんですか。」

男「まあ、そう人をロボットみたいにいわないで下さいよ。さつきから申し上げてますよ。うに、これが私の仕事なんです。」

女「仕事だとどんなことでもしちゃうんですか。」

男「どんなことでもつて、だいたい私の仕事は、こういう木の伐採とか、除草、草を刈る仕事とか、そういった作業ですから、前日に次の日の作業予定をもらって、それで現場に出向くんですよ。」

女「簡単な仕事なんですね。」

男「はい。簡単ですが賃金はまあまあなんです。あなた、御職業は？」

女「家事手伝いです。」

男「無職ですか。」

女「ですから、家事手伝いです。」

男「家事手伝いね。」

女「そうです。」

男「まあ、そういうことですから、この木がどうだから伐採する、ああだからしないでいい、そういう問題は私にはないわけなんです。

女「つまりあなたという人間は鋸の延長なわけですね。

男「何ですか？鋸の延長って。

女「ですから、普通はその人の意志が腕を動かして、鋸をひかせるわけですよ。つまり、その人の延長に鋸があるわけですよ。でもあなたは意志がないのと同じだから、あなたは鋸の延長ではないわけなんですよ。

男「すみません、私、高卒なものですから、そういう高尚な哲学についてはまったく学問がないんです。

女「私のいったことがお分かりにならないんですね。

男「皮肉でしょ、たぶん。私に皮肉おっしゃったんですよ。

女「そうです。わかってらっしゃるじゃありませんか。

男「皮肉をいわれて、いちいち仕事を思い止まってちゃ埒があきません。

女「あ、そうだ、いいこと考えました。

男「いいこと？

女「ええ、あのね、伐ろうとしたら、祟りがあつて鋸が折れたとか、駄目ですか。

男「あのね、テレビの番組じゃないんですから。そういうの信用してくれませんから。それにそんなこといったら、私に仕事なくなりますよ。

女「そうですか。

男「ええ。

女「残念ですね。

男「ええ。

女「駄目なのか。・・・きれいですね。

男「え？

女「ひこばえ。」

男「あなたがこの新芽をお出しになったのなら、一入（ひとしお）でしょうね。」

女「あ、またいいこと、思いつきました。」

男「何ですか今度は。」

女「時代はいまエコロジーなんですよ。自然回帰なんですよ。」

男「今度は自然を大切にして運動ですか。」

女「木を、自然を守らねばって思いませんか？」

男「思いますよ。当たり前のことですよ。」

女「じゃあ、なおさら、この木を伐るのはやめたほうがよくありません？」

男「それは緑の豊かな木でしょ。これ、枯れ木ですから。」

女「だってひこばえ。ひこばえを発見したので、森林保護のため伐採をやめたと、そうおっしゃって下さい。」

男「上役にですか。」

女「はい、伊原権三さんに。」

男「伊原作造です。」

女「その人に。」

男「何をいつてもたぶん駄目ですね。もうハンコついちゃってるから。」

女「そういう官僚主義やら利益優先政策が地球の自然を崩壊させるんですよ。」

男「大きくでましたね。しかし、あの辺りの林を伐採したのは、あなたがいまお住まいの住宅を建てるためでしたし、あなたのお家も木造でしょ、それ、かなりの木を伐採して作った材木で建てたものですよ。」

女「それはお互いさまです。」

男「私は鉄筋コンクリの公団です。」

女「日本は世界の各地で木を伐採して、非難されてるんですから、せめて、ここであなた

が英断して、この木を伐るのをやめたらどうですか。森林保護ですよ。

男「そういう話は聞いてますが、それだって無法にやつてるわけじゃないでしょ、その国の方針でやつてるわけでしょ。まあ、難しいことは分かりませんが、それにですね、森林保護なんてあなたはおっしゃいますが、たしか、森林保護のために、一本の木を成長させるには邪魔な木を伐採しなきゃならないっていいですよ。おまけにここは森林でも何でもないし、いくらひこばえがついたからって、これは枯れ木ですからね。

女「(ちよつと悄気たが) この木、伐られた後、どうなるんですか？

男「枯れ木ですから、燃やされるか、せいぜい廃材の利用というところで、割り箸になるのが関の山でしょうね。

女「ひどい話ですね。

男「そう眼くじらたてるほどのことはないと思いますが。

女「だって、ひこばえ。

男「それは、傷みいって、ご理解申し上げますが。

女「残念だわ。

男「ええ。．．．すいませんね。じゃあ、伐採しますよ。(鋸を構えた)

女「あ、ちよつと待つて下さい。(女は如雨露を取って、木に水をやる)

男「末期の水ですね。

女「こうやつてね、毎日お水をあげて、頑張れっていつて、それでセロを聞かせて。

男「私のこと、悪人だなんて思わないでくださいよ。

女「思いませんよ。だって、お仕事なんですよ。仕方ないですよね。

男「ええ、仕方ないですから。まあ、この木もですね、材木になって、貴方の住んでらっしゃるようなお家の一部になる、とそう思つて下さい、ね。

女「だって、さつきは燃されるって。

男「ですから、気持ちひとつですよ。

女「・・・」

男「(どうも味が悪いとみえて) ああ、この新芽、持って帰られますか？」

女「いいんですか？」

男「(新芽をもぎる) これにですね、水をおやりになってですね、セロをお聞かせになってですね、頑張れっていうのはどうですか。ひよつとするとやがて、大木に育つなんてことになるかも知れませんかよ。」

女「(あまり気がすんだようでもないのだが) そうですね・・・あの、

男「え？」

女「いえ、何でも。」

男「じゃあ、伐らしていただきます。(伐り始める)」

女は近くの手頃な石を拾うと、それで、職員の後頭部を一撃した。職員は気絶する。

女「(手にしたひこばえに) 頑張れ、頑張れ、ひこばえ。頑張れ、頑張れ、ひこばえ。」

男「(息を吹き帰す) うーんむむむむ。」

女「(さらに石でゴチン。もう一発ゴチン。ゴチンゴチンゴチンと殴りつつける。手をみると、血・・・) まあ、血が。勘弁してくださいね。明日、伊原権三さんに私、話してみますから。」

血濡れた手で新芽を掴み、見つめる女。次第に溶暗。



## 第二話・雨宿り

「いっぽんの木があった」という男の声。明るくなる。

鬱蒼たる森をぬけて、灌木の狭間の山道をしばらく行くと、丘が開けている。その中腹にいっぽんの木があった。

ここを下りきるとひなびた温泉町へと出る。

突然の雨に、その木に走りこんで来た女が二人、いずれも山歩きの出で立ちだが、雨具の準備はなかったからしい。

彼女たちは気がつかなかつたらしいが、木の下には先客があった。この木の下で眼下の風景をスケッチしていたらしい二十代半ばの若い男である。

女1 「持つてきたらよかつたね。

女2 「何を？

女1 「カッパか傘か。

女2 「あら、だから入れていこうつて私、いったのに。

女1 「いった？そんなこと。

女2 「だいたいあなたは、人の話を聞いてないんだから。

女1 「天気予報は大丈夫ねつていったんじゃないの？

女2 「その後よ。でも、用心のために持つていこうかつていったじゃない。

女1 「荷物になるからとかいって、入れるのやめたのあなたでしょ。

女2 「ほら、やつぱり聞いてたくせに。

女1 「あなたが独り言でいってただけよ。

女2 「独り言でも何でも、私、ちゃんと忠告したんだからね。

女1 「ああいうの、忠告っていうのかしら。

女2 「忠告だわ。

女1 「そんなにいうんだったら、どうしてあなた入れてこなかったのよ。

女2 「だから、・・出来るだけ軽装がいいかと思つて。・・・

女1 「人のせいばかりにするの、あなたの昔つからのくせよ。

女2 「もういいわ、喧嘩したつて雨はやまないんだから。

女1 「そうよ、ここでしばらく我慢してればいいのよ。

女2 「天気予報やつてない？

女1 「え？

女2 「ラジオ。

女1 「ああ、ラジオね。(ポケットから携帯ラジオを出して、イヤホンで聞いてみるが) やつてない。

女2 「通り雨でしょ、これ。

女1 「でも、さつき光つたの、あれ雷じゃないの？

女2 「音、しなかつたわよ。

女1 「遠雷つていうやつかしら。

女2 「山の天気は分からないつていうからねえ。

女1は先程稲光がしたほうを見ようとして、先客に気付いた。

女1 「あ、どうも。

男 「(軽くお辞儀した)

女2 「え？何？

女1 「(女2をつつ突く)

女2 「(気付いて) あ、どうも。入れてもらつてます。

男「(笑って)遠慮なく。と、いつでもこの木は僕のものではありませんが。

女1「馬鹿ね、あんた。

女2「だって。

女1「何が、だってよ。恥ずかしい。

男「山歩きですか。

女1・2「はい。

男「麓の温泉に泊まってらっしゃるんですか。

女1「ええ、そうです。貴方は？」

男「僕もそうだったんですが、今日、発ってきました。

女1「そうですか。

女2「見かけなかったわね。

女1「ちがう宿だったのよ。・・あの、私たち、『くぐも屋』つてとこにいるんです。

男「僕は『興隆館』でしたから。

女1「どれくらい、いらっしゃったんですか？」

男「五日ばかりです。

女2「私たち昨日からなんです。

男「逗留されるんですか。

女1「ええ、三日ほど。

男「あそこは、ひなびたい町ですよ。

女1・2「はい。

男「かといって、手持ち無沙汰、身持ち無沙汰で焦燥をもよおすほどの居心地の悪い田舎  
というわけではない。町の機能は揃っているのがあります。コンビニエンス・

ストアもありますからね。名前は聞いたこともないものだけど。

女1「大きな郵便局がありましたね。

男「・・・ええ。たぶん、町で一番の建物なんでしょう。後は、山里が自然に観光で発展してきたという、そんな感じかな。観光地にみられるようなケバケバしさが無いのが救いですね。

女1「溪流に面して、旅館が並んでいるのいいですね。

女2「そう。露天風呂に入りながら、川の流れを見物。

男「水浴させてくれるところがあるはずですよ、あの川。もう少し上流のほうかな。

女2「うわあ、それじゃあ、行ってみなくっちゃ。

女1「あなた、水着持ってきたの？

女2「持つてくるわけじゃないじゃない。

女1「裸で泳ぐ気？

女2「大丈夫よ、短パンで。すぐ乾くわよ。

女1「泳がれました？

男「僕は水ん中は駄目なんです。

女2「カナヅチなんですか？

女1「ちよつと、失礼よ。すみません。

男「小さな頃、溺れた経験があつて、それ以来、苦手なんです。

女2「そうですか。ごめんなさい。

男「いえ、・・・山はどうでした。

女1「ええ、空気が冷たくて、清らかでした。

女2「でも、ちよつぴり怖かったわね。

女1「少しね。

男「この辺は、日本でも有数の檜の産地らしいんです。

女1「檜ですか。

男「ええ。いい材木が採れるそうです。

女1「でも、私たちにはどれが檜でどれが杉だか、さっぱり。

女2「エノキと椎茸くらいは分かるけどね。

女1「また馬鹿いって。

男「僕もあまり植物には詳しくないんですが、ついこのあいだは、屋久島の縄文杉というやつを見に行ってきました。休暇をとると、あちこちスケッチしてまわるのが趣味なんです。

女1「ああ、それってあの千年杉とかいうやつですか。

男「屋久島は樹齢千年以上の杉が多くて、それより若い杉は小杉と呼ばれているんです。

樹齢八百年の杉でも、屋久島では小杉なんです。

女1「へーえ、そうなんですか。八百年でも小杉なんですか。

男「縄文杉と呼ばれているのは、一番の古株で、樹齢七千二百年だそうです。

女1・2「七千二百年、すつごうい。

男「化け物ですよ、瘤だらけの。周囲が二十八メートルといいますからね。

女2「この木は樹齢何年くらいかしら？」

男「せいぜい、七十年から百年くらいじゃないですか？」

女1「これ、何の木ですか？」

男「さあ、何かな？杉や松や檜でないことは確かだけど。栗かも知れないな。

女1「へーえ、栗の木か。

女2「縄文杉というからには、縄文時代からあるんでしょうね。

女1「樹齢七千二百年なんだから、そうに決まってるじゃない。

女2「縄文時代って、何年前？」

女1「一番前なんじゃないの。

女2「何よ一番前って？」

女1「日本の一番昔ってこと。

男「紀元前七千年から紀元前二世紀ごろっていわれてますね。ですから、やっぱりその杉は縄文時代のものなんでしょう。」

女1「ほらね。」

女2「何が、ほらねよ。」

男「グループになつて、ガイドさんに案内してもらうんですが、その時、お年寄りの方が二人一緒だったんです。どちらも八十前後だったと思います。御夫婦なんじゃないかな。寄り添いながら立つてらっしゃいました。そんなところに老人の足だけでは無理だろうから、きつと息子さんかお孫さんと一緒にいらしたんでしょう。その方たちが、瘤の化け物の杉を目の当たりにして、睨むような眼で、それを見てらしたんです。」

女2「あ、わかる、その時の気持ちというか、気分。」

女1「何がわかるって？」

女2「だって相手は七千二百年、しかもこの先まだどれくらい生きるかわからない化け物でしょ。きつと人間の寿命の儂さを思ったんだわ。たかだか八十年でお終いなんだから。」

女1「と、というか、敗北感ね。人間の存在の小ささを思い知ったのよ。」

男「老いることはこうまで醜いことなのか、と思つてらしたのかも知れませんが。ともかく、杉という言葉から連想される端整な佇まいは完全に覆されますから。とはいつても、その杉も最初からそんな形をしていたんじゃないでしょう。最初はちいさな緑の芽だったわけですから。」

女2「ね、行ってみようか、私たちも。」

女1「そうね。それもいいわね、縄文時代への旅ね。」

稲光がする。続いて雷鳴。

男「だいぶ、近くなってきたな。

女2「大丈夫よね。

女1「何が？

女2「落ちないわよね。

女1「あの、(男を見た)

男「大丈夫だと思いますよ。

女1「大丈夫よ。

女2「どうして？

女1「(男に) どうしてですか？

男「この木、落雷の跡がありませんから。ここに落ちたことはないでしょう。だから、たぶん大丈夫だろうと思うんです。

女1「百年平気だったんだから、大丈夫ってわけですよね。

男「ええ、まあ。

女2「(男のスケッチブックを見て) 絵をお描きになるっておっしゃいましたよね。

男「ええ、でも下手の横好きのスケッチですよ。

女2「屋久島の縄文杉、お描きになりました？

男「そのつもりだったんですが、さすがに僕も圧倒されて、何も描かないで帰って来ました。さつきまでここから、あの辺りを描いていたんです。

女1「あの森が、檜ですか？

男「そうじゃないかな。いや、ほんとに僕は植物は苦手なんです。檜が日本の木造建築には無くてはならない木だということぐらいしか、知らないんです。

女1「檜ってそんなにいいんですか？

男「らしいですね。その強度、強さですね。それから、湿気に強くて腐敗しない。真っ直ぐで木目が美しい。香りがよくて色の光沢が柔らかい。そういう特徴があるらしいで

す。女1「お詳しいじゃないですか。

男「旅館の人に聞いたばかりですから。

女1・2「なあんだ。

男「でも、檜舞台ついでいうでしょ。ちゃんとした劇場の舞台には丈夫で品のある檜が使われているわけですよ。それで、出世することを檜舞台に立つとかいうわけですから、やっぱり優れた樹木なんですよ。

女1「ああ、あれが檜か。

女2「このあいだ観た舞台のあの白い木？

女1「そう。

男「その白さも軟らかなんだそうです。光を強く反射しないんですね。ですから舞台照明の点からも申しぶんないわけです。これは知り合いの照明家から聞いたことです。

女2「それに、檜つて反りがないのよね。

女1「何よ、知ったふうに。

女2「だつてそうなんですよ。

男「檜の全てがそうだとはいえないですよ。やっぱり年輪を重ねる途上においては、組織に歪みを生じるものもあるらしいんです。材木に挽こうとすると裂けたり反ったりするらしいです。専門家はそれをアテと呼んでるつて聞きました。

女1「アテ。

女2「性格の歪んだ木もあるわけね。

男「いや、どうもそう言い切れないみたいですね。何の障害もなしにスクスク育ったのは、それで逸材となるわけですが、雨や嵐や気温や日照、そういう自然と闘ったやつはとうしてもアテを残すらしいです。例えばここに二本の檜があるとして、両方とも最初は真っ直ぐのびていたのが、あるとき、片方の木に太陽を遮られて、もう一本の木が何とか日照を得ようと、力をこめて太陽のほうに向いたとしますね。そうすると、木

の内部の組織にネジレが生ずるんです。これがアテになるんです。生きようとした努力の結果がアテになるわけなんです。

女2 「そんなの、ひどいじゃない。

女1 「そうね。

女2 「それなら人間なんて、その、アテばかりになっちゃうわ。

男 「ええ、そう言えるでしょう。

女2 「檜に負けちゃうわけね。

女1 「(男に) その話も旅館の方にお聞きになったんですか。あの、アテの。

男1 「旅館にあった観光案内のパンフレットで読んだんです。

女1 「あら、私たちの宿に、そんなのなかったわね。

女2 「あつたけど、読まなかっただけよ。

女1 「ええ？ そうだっけ。

女2 「ねえ、どうして植物が苦手なんですか？

男 「さあ、なんでだろうな。植物つてのは、女性を連想させるからかな。

女2 「それつて、女性は苦手つてことですか。

男 「ええ、もう、早く男女同権の社会がきて欲しいです。

女1・2 「えー？

男 「いや、冗談。そうですね、植物というやつで記憶があるのは、・・・小学生の頃、アサガオを植えたんですが、驚いたことに、昼にも咲いてるんです。あれは、不思議でしたね。

女2 「それヒルガオじゃないんですか？

男 「いや、朝もちゃんと咲くんです。それから夕方も咲いてたような記憶があります。

女1 「混じつてたのかな。

女2 「同じツルに？ まさか。

男「混じつてるといえば、茄子だったかの苗木を植えたら、トマトが成ったことがあったな。新聞社の人がわざわざ写真を撮りに来て、次の日の朝刊に載ってました。

女2「茄子の苗にトマトが。

女1「へーえ。

男「科目っていうんですか、同じらしいですね。だから、あり得ないことはないって、学者のコメントがついてましたね。

女1「学校のさ、中庭にね、百日紅（さるすべり）あつたのよ。あれつてさ、ほんとに猿が滑りそうな木肌なのよね。

女2「うん、つるつるしてる。

女1「一度でいいから実験してみたかったな。

女2「実験つて？

女1「猿つれてきてさ。

女2「滑るかな。

男1「滑りませんでしたね。

女1・2「やったんですか？

男「（頷く）

女1「あなた、植物とかの思い出とかある？

女2「私はね、・・・あるある。

女1「え、何？

女2「お家の庭にイチジク植えたの。

女1「うんうん。

女2「苗木よねあれも。しばらくしたら実がなつたの。

女1「うん、そいで？

女2「食べたら美味しかった。

女1 「そいだけ？」

女2 「こいだけ。」

女1 「ふーん、まあね。」

女2 「美味しいのよ、イチジクって。」

女1 「イチジクか。あれって、ちよつとグロテスクなんだけどね。裂けて赤い実がのぞくとね。」

女2 「それは柘榴（ざくろ）じゃないの？」

女1 「イチジクも同じよ。」

女2 「柘榴よ。」

女1 「脳天カチ割ると、柘榴のようなもんだって、言うわよ。」

女2 「頭蓋骨を叩き割った話をしているのじゃないのよ。イチジクの話よ。」

女1 「（男に）ねえ、どっちだと思えます？」

男 「よく、分かります。」

女1 「そうよね。草や木や花って、いつも何処かで眼にしているから、ありふれてて、普段はあんまり気にしないのよね。」

男 「でも、好きな人は多いんじゃないですか。最近、アパートやマンション住まいで、動物が飼えないから、鑑用植物をペットのようにして育ててる人多いですよ。」

女1 「動物が駄目だから、植物か。ね、木とか、花とかって、自分が生きてるってことを自覚してるんだらうか。」

女2 「自覚って？」

女1 「意識してるのかってことよ。」

女2 「植物に意識なんて・・・あるの？」

女1 「自分が赤いとか、青いとか、高いとか低いとか、知ってんのかしら。芽だとか花だとか、木だとか。」

女2 「知らないんじゃない。

女1 「じゃあ、生きてるっていいないわね。自分があるのか無いのかもわからないんだつたらさ。

女2 「でも、あれ、生きてるじゃない。

女1 「風が吹いて苦しいとか、お日様が照ってうれしいとか、雨が降って喜ぶとか、そういうことないのかな。

女2 「そりゃあ、あるんじゃないの。

男 「サボテンを前にして斧を振り上げたら、サボテンがあきらかに恐怖と思える反応をグラフに描いたという実験ならあるようですね。

女1・2 「へーえ

女2 「サボテンって恐怖心があるんだ。

男 「ある種の防衛機構かもしれませんが。

女1 「それって、心があるってことかしら。

男 「自然のものですから、人間の心のようなものではないでしょう。シークレット・ライフというやつですね。我々には考えもつかない秘密の生涯ですね。

女2 「シークレット・ライフ。

女1 「秘密の生涯。

女1・2 「軽く笑う）ふふふふ。

遠くで雷鳴。

男 「雷雲は迂回してくれたようですね。雨ももうすぐあがるでしょう。

女2 「ね、ラジオ貸して。

女1 「どうすんの？

女2 「天気予報。

女1 「(ラジオを女2に渡す)

女2 「(ラジオを聞いている)

女1 「やってる?

女2 「ニュースやってるから、終わりにやるんじゃないの。・・・え?

女1 「どうしたの?

女2 「(しばらくニュースを聞いた後、男を見た)

男 「郵便局に強盗が入ったニュースをやってたんですね。今日午後12時15分ごろ、この麓の温泉町の郵便局に覆面の強盗が入ったニュースでしょう。男は現金二百五十万円を奪うと車で逃走。男の人相は分からなかったが、やや小柄に見える中肉中背、年令は三十歳前後。職員の話では左手に包帯を巻いていた。そうなんですね。

男は腕時計を見た。その左手には包帯が巻かれている。

男 「別に怪我をしていたわけじゃないんです。これはワザとなんです。(時計を外して、包帯を解き始めた) 印象づけておいて後で、こうやってとるつもりだったんです。車で逃走したと見せかけて、山路を抜けることは計画の上なんです。車は溪流に沈めました。黙っていてくれれば危害を加えたりしません。僕は誰も傷つけてはいませんから。雨はもうすぐあがるでしょう。雨があがるまでここにいて下さい。僕はこれで失礼します。(立ち去ろうとする)

女2 「待つて。

男 「何です?

女2 「あなた、気が変わって、やっぱり私たちのことを始末するかも知れない。だって私たち喋るかも知れないでしょ。

男「・・・そうなんですか。

女2「だから、はつきりさせておきたいの。

女1「何いつてるの、あなた。

男「ハッキリさせるとは？

女2「いま、私が聞いたニュースは二百五十万円の強盗の話じゃなかったってこと。

男「僕のことじゃなかった？

女2「もう少し、額の大きいニュースよ。一億五千万円の横領の話。あさがお銀行楠本店

で起きた事件よ。犯行は内部の者と断定。現在、二名の女子職員が行方不明になつて

おり、特別捜査本部はこの二名の女性職員の行方を探索中。

女1「私たちのことね。

女2「そう。思わずバレやしないかと思つて、(男に)あなたを見たの。

女1「(男に)じゃあ、お互いさまということで、うまく逃げおかせて、また何処かで遇

うことが出来たら、今度も木や花の話をしながら、飲みましょ。

女2「雨あがったみたい。

女1「それじゃあ。

女2「お話、面白かったわ。じゃあ。

女1「ねえ、私たちもあれかしら。

女2「え？

女1「アテっていうやつ。

女2「(笑つて) そうかもね。

女、二人笑いながら、去つた。

男、呆気にとられて立ちつくしているが、木に近寄ると、

男 「二億五千万円。．．．アテか。．．．

溶暗。



### 第三話・葬儀のあと

夏の日、一本の枯れた木がある丘。

喪服の女1が立っている。ぼんやりと、裾野をみている。

女2がエプロン姿でやってくる。

女2 「お嬢さま。ここにいらしたんですか。粗餐の支度が整いましたけど。・・・

女1 「気づかないでいるのか聞こえているのか、黙している」

女2 「皆様ぼちぼち、もうお膳についておいでですが。」

女1 「初めて女2に気を向けて」私はいいよ。

女2 「お召し上がりにならないんですか。」

女1 「いまは欲しくもないんだ。」

女2 「昨日から何も召し上がってないじゃありませんか。」

女1 「私はいいから。」

女2 「何をごろんになっているんですか？」

女1 「姉はここに、何をしに来ていたんだろうな。」

女2 「はい？」

女1 「死ぬ二月ほど前から毎日のように、姉はここに来ていたんだろ。お前、そういつてたじゃないか。」

女2 「はい、その通りです。そう申しました。ここに来るのを日課のようにされてました。」

女1 「姉はここで何をしていたんだろう。何を見ていたんだろうな。」

女2 「私、そこまでは存じあげませんけど。」

女1 「なにかいつてなかったかい？」

女2 「いいえ、何も。日頃からとりたててなにかおっしゃって行動される方ではございま

せんでしたから。

女1 「何もいわず、毎日ここに来てたんだよね。」

女2 「はい。どうかなさいましたんで？」

女1 「姉の書いた本などまともに読んだことがなかったけど、死なれてみると、あれやこれや、いまになつて、気になつてしょうがないよ。」

女2 「私、賄いがありますので、これで失礼します。なるたけ早くお戻りになつて下さいまし。」

女2, 去る。入れ替わりに男が二人、片方は喪服、もう一人は平服に黒い腕章をつけて登場。

男1 「やつぱりここでしたか。丘に登られる姿を見たとき聞きましたから、ここかと思いましたが。」

男2 「黙ってお辞儀」

男1 「けっこうな道のですね。麓からはそうたいそうなものには見えないのに。」

女1 「あの、どちらさまでしたでしょう。」

男1 「ご挨拶が遅れまして申し訳ありません。私、先生にお世話になつておりました親英社のものです。(名刺を出す)

女1 「(名刺は受け取らずに) そうですか。」

男1 「こちらは、私の後輩にあたる者ですが、やはり先生の原稿を載っていた者です。」

男2 「(名刺を出そうとするが)」

男1 「いいよ。(自分も名刺を仕舞う)」

女1 「なにか、急な御用でも？」

男1 「身内の方が、妹さまお一人と聞いておりましたので、著作権のことやら何やら、今

日はお取り込みと存じますが、後日相談にあがりたいと思ひまして。

女1「そうですか。それは御丁寧に。

男1「もつと早くお声をかけたかったのですが、失礼かと思ひまして、山（注 火葬場のこと）からお帰りになるのを待つておりました。ああいったことは、我々の業界ではよくあることで（失言に慌てて）いや、それは昔はそうであつたかも知れませんが、今は何と申しますか、あつてはならないことですが、その、いや、心中お察し申し上げます。と、申しますか、私たちにとりましても、非常に衝撃的なことであります。さぞ、お気をお落としのことと痛みいつてご同情申し上げます。社交辞令のようであり、し訳ないのですが。

女1「いいえ。そちら様こそお忙しいところをわざわざありがとうございます。あの、お食事は？

男1「いえ、おかまいなく。

女1「支度ができているそうです。

男2「どうします？

男1「馬鹿。

男2「すいません。

男1「あの、立ち入ったことをお聞きしますが、遺書のような者は残っているのでしょうか。

女1「（その質問には答えず、男1と2を一瞥して）私は姉のように文学の素養はまったくないのでわからないのですが、姉はこの丘のことを何か書いておりましたか？

男1「丘？・・・この丘ですか。

女1「ええ。

男1「そうですね、特に読んだことはありませんが。（と、男2に目で聞いてみるが、男2は首を横にふつたので）・・・この丘が何か。

女1「姉は死ぬ二月前から、毎日のようにこの丘に登ってきていたようです。

男1 「そうですか、この丘にですか。この丘は・・・特に見晴らしがいいというわけでもありませんね。

女1 「二昔前はそうではなかったんでしょけれど、今では町の景色も変わってしまいましたから。

男1 「ずっとここにお住まいでしたね。

女1 「姉は生まれた時からここです。両親を早くなくしましたから、十違う姉が母親代わりでした。私も子供のころはここによく登ったような記憶があります。その頃はこの木も枝葉があつたと思うんですけど・・・

男1 「この木、枯れて久しいのですか。

女1 「さあ、どうなんでしょう。私はもう十五年近くここにはもどっておりませんから。

男2 「あの。

男1 「なんだ。

男2 「先生がおっしゃっていたことを、ちょっと思い出したんですが。

男1 「おっしゃっていたこと？

男2 「ええ、そんなにたいそうなことじゃないんですが、何かの話のついでに、おっしゃったことなんです。

女1 「この丘のことですか？

男2 「いいえ、そうじゃないんですが。

男1 「もったいつけないで、いえよ。

男2 「はい。あの、このとおりの表現じゃなかったと思いますが、ええと、『植物というのは目が見えないだけなのよ。木や花は目が見えないだけなのよ』と、たしかおっしゃいました。

男1 「植物というのは目が見てないだけなのよ。木や花は目が見えないだけなのよ。何だいそりゃ。(女1に) 何か、心当たりでも？

女1「いいえ。姉は、ほんとにそんなことを申したのでしょいか。

男2「ええ、たしかに、ふいにそうおつしやつて、僕もなんのことだかよくわからなかつたんですけど。

男1「何のことでしょうね。

女1「木や花は目が見えないだけなのよ。…わからないけど。(と、枯れた木を眺めて)…もしかすると、姉はここから何か景色を見ていたのじゃなくて、この木を見に、ここへ登ってきていたのかも知れませんか。

男1「この木をですか。

男2「何のためにです？

女1「たった一人の肉親であるのに、姉妹だというのに、いえ、だからこそやはり他人なんですね。いま思えば、お互い知らぬことばかり。御存知でしょうけど、姉はあの歳になるのに独身でした。生涯独身を貫くつもりだったのかも知れません。私は姉の浮いた噂を聞いたこともありませぬし、恋愛の現場を見たこともありませぬ。でも、姉も一人の女性です。そういうことの一度や二度はきつとあつたと思います。

男2「ここで、何かあつたんでしょうか。その、

女1「ひよつとしたら、この木はそんな姉の秘密を、一つや二つ聞かされて、知っていたのかもしれないね。とはいってみても、何があつたにせよ、もう終わってしまったことです。この木と同じ。(木を暫し見つめていたが)つまらないことをいってしまいました。

女1は急に、踵を返して麓への道を下り始めた。

男1「(女1が消えるのを見届けると、汗を拭き吹き、木をみつめて)夏の葬式はかなわないな。

男2 「(同様に) そうですね。・・・どうしたんでしょうね。

男1 「何が。」

男2 「この木。」

男1 「姉も姉なら妹も妹だな。何だか変な姉妹(きょうだい)だぜ。落ち着いたら、日記やら手紙の類が残っているか調べさせてもらおうぜ。

男2 「はい。遺書は無いんでしょうかね。」

男1 「みたいだな。追悼記念特集の次は、書簡集か日記の出版だな。五万はいくだろ。」

男2 「ええ、軽いですよ。でも、出版させてくれますかね。」

男1 「そこは俺たちの腕次第、金次第さ。印税の率をテンパー上げるとか、いろいろ方法はあるさ。」

男2 「そうですね。もう死んじやってんですからね。これからはあの妹さんが著作権を継承するんですよ。不労所得が倍増しますね。」

男1 「文庫予定が二十冊くらいあるだろ。けっこうなものだぜ。・・・この木が何だっつんだ。変な女だな。」

男2 「何なんでしょうね。」

男1 「丘の木は知っていた、なんて小説のタイトルのもならないよな。」

男2 「まったくです。」

男1 「まったく作家先生つてのは、何を考えて生きてんだか。」

男2 「何を思っつて死ぬんだか。」

二人、互いに軽く笑う。

男1 「腹へつたな。」

男2 「御馳走になつていきますか？」

男1 「いや、駅前でラーメンでも食おう。

男2 「はい。」

二人、もと来た道を帰り始める。

「いっぽんの木があった」という女1の声が聞こえて・・・溶暗。



第四話、タイムカプセル

一本の木がある。

背広姿の男が二人、やってくる。

男1 「やけに暑いじゃないか。

男2 「蒸しますね。

男1 「秋だろ。

男2 「昨日は肌寒かったですね。

男1 「異常気象というやつかな。

男2 「異常気象なんて生易しいことは言わないみたいですよ。

男1 「何というの？

男2 「気象変動。

男1 「気象変動ね。そいつはどのようなの？

男2 「どういうつて？

男1 「暑くなるのか、寒くなるのか。

男2 「それがよく分かってないみたいですな。

男1 「分かってないつて？

男2 「だから、地球的規模で、このまま暑くなるのか、寒くなるのか。つまり、年々暑くなつてるところもあれば、年々寒くなつてるところもあるし、暑くなつたり寒くなつたりしているところもあるらしいんです。

男1 「出鱈目なわけか。

男2 「だから気象変動というんじゃないでしょうか。

男1 「そういえば、今年は四月に雪が降つたな。

男2 「東京ね。関西では五月に朝霜が降りたつていいますね。

男1 「寒くなつてるのかな。

男2 「それより南に下がると、平年より暑い日が多いらしいんです。

男1 「何が原因なんだ。

男2 「それもいちがいに言えないみたいですね。海流のせいだとか、大気のせいだとか、木材の伐採で、雨がどうのとか。よく分かります。

男1 「しかし、暑いな。まるで梅雨どきみたいな気候じゃないか。

男2 「皆さん遅いですね。

男1 「・・来たよ。

男が一人、女が三人やつてくる。男は小さなスコップを手にしている。

男1 「遅いじゃないか。

口々に「お待たせ。

男3 「スコップ探してたからな。

女1 「ごめん、途中でトイレ行きたくなくなっちゃつて。

男1 「ビールの飲み過ぎだよ。

男3 「どうする、さつそく掘るか？

女2 「掘ろ、掘ろ、ね、何処だった？

女3 「この木の根本でしょ。

男2 「僕、掘りましょうか。

男3 「そうだな。

男2、木の下をスコップで掘り返し始める。

女2 「景色を眺めて」少しも変わってないね。

女3 「そんなことないって。全然、変わってるって。

女2 「そうかな。

女1 「景色？

女2 「そう。

男1 「変わんのあたりまえだろ。何年経つんだ？

女2 「中学の時だから、

女3 「二十年くらい？

男1 「みんな、もう四十に手が届くんだからな。

女2 「あんまり高いビルとか、ないね。

女1 「まだまだ田舎よ、ここは。

女3 「せまく感じるわ、とても。

女2 「何処？

女3 「何もかも。みいんな小さくなったみたい。

女2 「私たちが成長したんじゃないの？

女3 「中学のときから、身長がどれだけ伸びたっていうの、馬鹿ね。

男3 「どう？出た？（男2に）

男2 「ええ、ありました。（小さな箱を取り出す）

女3 「こんな箱だった？もう少し大きくなかった？

女1 「これよ。

男3 「間違いない、これだ。

男2 「開けてみますか。」  
男1 「決まってるじゃないか。そのために来たんだろ。」  
女2 「なんかドキドキね。」  
女3 「(女1に)あんた、なんて書いたか憶えてる？」  
女1 「何だったかな。」  
男2 「僕、憶えてますよ。」

箱のふたが開くのを覗き込む。  
開いた。

ガラスの壇が出てくる。中に小さく巻かれた紙が幾つか入っている。

女3 「どうする？それぞれ読む？」  
男1 「どうでもいいよ。」  
女2 「代表で誰かが読めば？」  
女1 「会長、読めば？」  
男3 「俺が読むの？こういうのは女性が読むほうがいいと思うけど。」  
女1 「何で？」  
男3 「いや、特に理由なし。」  
女3 「じゃあ、私、読むわ。」  
男1 「いいから、早くしなうぜ。」  
女3 「(壇から巻かれた髪を取り出して)これは、伊藤純一のだ。」  
男1 「それは読んでも仕方ないだろ。」  
女3 「どうする？」  
女2 「やめよ。」

女1 「私もやめたほうがいいと思う。

男3 「でもさ、純一が将来何になりたかったか、知りたい気もするな。

男1 「将来もクソも、死んだ者は仕方ないじゃないか。

男3 「いや、だからさ、余計にさ。

男1 「・・・それもそうだな。

女3 「ちよつと待つてよ。やつぱりやめようよ。死者に対する冒瀆って感じがするよ。

男1 「中学ん時からエンタ吸つて、肺癌で死にゃあ、自業自得だよ。

女3 「どうするの？

男1 「何でノツケにそんなもの出すんだよ。

女3 「だつて偶然なんだもん、しょうがないでしょ。

男2 「後回しにして、後で考えれば？

女3 「そうしよう。えーと、次は香山伸介。

女1 「ちよつと、どうしていない人のばかり出すのよ。

女3 「私、籤運、悪いんだもん。

男3 「でも、香山は読んでもいいんじゃない。

女2 「そうよね、売れっ子の作家になつた同窓生が、中学の時、将来のことをどう考えていたかつて、興味あるもの。

男1 「ここは、欠席裁判ということで、読んでいいことにしよう。

女3 「じゃあ、読むね。・・・『香山伸介。僕の将来に夢はない。きつと三十歳まで生きていないと思う』だつて。

男1 「四十に手が届くつての。

女2 「ちよつと気障よね。

女1 「だから、作家なんかやつてられるのよ。

男2 「そういえば、このあいだ、テレビ、NHKに、出てましたね香山さん。

男1 「だがよ、香山もよ、俺、このあいだ、東京でさひよつこり遇つたんだけどさ、あんまり楽しそうな顔してなかつたぜ。マンションのひとつも買ってくれよつて言つただけどさ、金ないんだつて。作家てのは意外に儲からないみたいだな。」

女3 「小説なんてのは駄目なんじゃないのう。」

女1 「特に純文学はねえ。」

男1 「小説のほかに仕事を持ってないと駄目なんだつてさ。どうもあいつ、女に食わせてもらつてるみたいなんだ。いや、それが悪いとはいわないよ。」

女2 「そうよねえ、だつて、純文学の作家つてさ、文学で食べてるわけじゃないでしょ。」

女1 「だから、駄目なのよ。」

男3 「次いこう、次。」

女3 「次、江藤浩二」

男1 「何だ、俺じゃないか。」

女2 「どういうこと書いたか、記憶してる？」

男1 「全然。」

男3 「早く読めよ。」

男2 「読んで下さい。」

女3 「読むわよ。『江藤浩二。世の中を動かしているものは、金と政治だ。大人は汚い。』

将来は海外で奉仕活動をしたい。砂漠に花を咲かせましょう』

男1 「それ、もう捨ててくれ。」

女1 「砂漠に花の人が、何で不動産屋やってんの？」

男1 「やってないよもう。倒産したつていったでしょ。バブルでパチン、お終い。」

女1 「今、何してるつて？」

男1 「聞くなよなんべんも。パチンコ屋の店員やってるつて言つたでしょ。」

女2 「砂漠に花はどうするの？」

男1 「パチンコ屋でチューリップ咲かせてるよ。だからな、俺もしばらくは女の方な、そう  
いうことなのよ。あーあ。

男3 「次いこ、次。

女1 「次いきましよう。

女3 「次は、加藤麗子

女2 「きゃつ、私。

女3 「読むわよ。

女2 「何て書いたのかな。

女3 「えー、『加藤麗子。人生の幸福はよき伴侶に巡り合うこと。そのためにスチュワー  
レスになる』何、これ？

男1 「ガキじゃあるまいし。

女2 「ガキだったんだから、仕方ないじゃない。

女1 「あなた、英語苦手だったんじゃないの？

女2 「それがネックだったのよね。

女3 「だんなの仕事、何だった？

女2 「飛行機の整備やつてる。

男3 「まあ、近いところには、いったわけだ。

女2 「図書館で出会ったの。隣に座った男がいまの旦那。

女1 「それはまあ、ロマンチックなことね。

女3 「次、読もうか。

男1 「どんどん進めてくれ。夢破れて山河ありだ。

女3 「串間銀子。

女1 「私じゃない。

女3 「『私の夢は自立する女性。マスコミ関係で成功すること』

女1 「どうせ、私は百姓の女房よ。田圃に入つて、草取りしてるわよ。

女3 「何で見合いなんかしたの？

女1 「成り行きついでいうやつでしょ。

女2 「でも、これからは農業の時代なんじゃないの？銀子は今を見る目があるのよ。

女1 「そういうことを考えたりした時もあったけど。ハウスでトマト作つて、ああ、これが農業の近代化、と溜め息ついてるわ。

男1 「おらおら、次だ。

女3 「楠良平

男2 「僕ですね。

女3 「『楠良平。僕の夢は消防士になること』

女1 「なつたじゃない。

女2 「なつたじゃないの。

男2 「ええ、おかげさまで。

男3 「可能性からいえば、一番現実的で、実現しやすい夢だな。

女1 「消防車に乗ってるの？

男2 「いや、僕は救急車なんです。

女2 「消防士つて火事や急病人がない時は何してるの？

男2 「訓練ですね。

女2 「レンジャー部隊みたいなやつ？

男2 「はい、後は、電話を待ってます。十台くらい並んでるんです。これが、半ば電話相談みたいなんです。このあいだは売春の仕事してる女の人から電話があつて、お茶ひいてばかりで食えないから、今から焼身自殺するつて言うんですよ。慰めるのが大変でした。明日は客があるよ、なんて。でも、ガソリンを部屋にまいて、いま煙草に火をつけたつて言うんです。それで、僕が電話で話をつないでる間に出勤させて、あわ

やっつてところを何とか。

男1 「いい仕事してるじゃないの。

女3 「御立派。

女2 「立派じゃない。

男2 「しかし、皆さんより一つ年下とはいえ、この歳で自炊生活ですからね。

女2 「消防士って自炊なの？

男2 「ええ、みんなそうしてます。

女1 「次は誰？

女3 「次、大島誠

男1 「出ましたね、生徒会長

男3 「まあまあ。

女3 「読むわよ。『大島誠。ずばり、僕がやれる仕事は弁護士だ。悪と戦うぞ』

男1 「お前がワルじゃないか。

男3 「え？何で？

男1 「知ってるぞ、この野郎。役所にいるのをいいことに、業者にだいぶ貢がせてるんだろ。

男3 「毎月、ビールが1ケース届くあれのことかな。

男1 「とぼけるんじゃないよ。俺がリークしてやろうか。裏取引の数々、談合の数々。

男3 「まあ、いいじゃない。四十に手がとどくんだからさ。誰でも一緒だよ。

女1 「弁護士になるなんて、よくも言ったもんね。

男3 「いや、法律の勉強はしたよ。それが結構、役にたってるんだな。

男1 「飲ませろ、食わせろ、抱かせろ、お土産つきか。

男3 「ここだよここ。頭は生きているうちに使えつてこと。

女1 「最後はあなたね。津っ子。

女3 「私、もういい。なんだか、嫌になっちゃった。

男1 「ずるいじゃないか。

女3 「いい、絶対嫌。うんざり。私はただの主婦。パートでスーパーマーケットに勤めて  
いる普通のおばさん。旦那は別居中。それだけ。昔の夢なんていまさら覗いたつてど  
うなることでもないし。

男1 「まあ、しょうがねえわさ。二十年以上昔のことなんだからな。

女1 「タイムカプセルか。まあ、こんなものよね。でも、みんな安心したでしょ。

えっ？という顔。

女1 「内心、ほつとしてるんじゃないの。私もそう、なんかとても、ほんとはほつとした。

ちよつと楽になったわ。そうたいしたことじゃないのね、なんていうかさ、人のさ、

うん。・・・

女2 「ねえ、せつかく今日、集まったんだしさ、もう一度タイムカプセル埋めない？

男1 「馬鹿言うんじゃないよ。四十に手がとどくつてんだぜ。

女2 「だって、あと二十年経つても、六十前じゃない。また人生変わってるかも知れない  
じゃない。

男1 「どういう死に方がいいか、書くのか。

女2 「将来の夢よ。

男2 「いいですね。まだ将来つてもものがありますもんね。

女1 「この木はさ、二十年立つててさ、二十年後も立つてるわけでしょ。

女3 「それが、どうしたの？

女1 「何考えて立つてんのかな。

女2 「ねえ、どう？

男1 「俺はごめんだな。

女3 「私もパス。

女1 「ここで記念写真撮ろうか。この木をバックにして。私、カメラ持ってきたから。

男2 「いいですね。それで、その写真を持って、二十年後にまたここで集まるってのはどうでしょう。

女2 「それも、一種のタイムカプセルよね。いいじゃない。

男1 「写真撮るくらいなら、いいけど。

女1 「とりあえず、写真撮ろう。

男3 「何の記念？

男1 「二十年たって、刑務所に入れられたお前がシャバにいた時の記念だ。

女1 「セットするわよ。

女1、シャッターをタイマーにセットして、カメラを置いた。それぞれカメラを見る。

フラッシュが光った。

帰っていく彼や彼女たち。

